

特別課程「住まいと健康」

コース主 任 松本 恭治

副主任 吉田 拓正

副主任 鈴木 晃

平成5年度の当コースは6月16日から7月16日の間に行われた。定員30の所に26人の応募でやや例年より応募者数が減じた。この理由は、保健婦の参加を促す目的で、今年度初めてコース案内に環境衛生監視員と保健婦の定員を各々15名と明記したものの、保健婦の参加はさほど増えず、4人の応募に過ぎなかったことが影響している。複数の職種に対応するコースは公衆衛生院の特別課程ではあまり例がないだけに、派遣元での調整にとまどいがあったことは十分予想されるが、建築衛生学部では応募数が総定員と大きくずれない限り、当分現状の募集形式を踏襲する予定である。

昭和60年に「住居衛生コース」を設置し、平成5年度に「住まいと健康コース」と改称して実施は6回を数えるに至った。現場に戻った修了生が増えてきたことから、応募者のコース設置目的に対する理解は高まってきたが、派遣元自治体には大きな変化がなく、やや大都市偏重である。過密居住、人工環境に代表される都市の住宅環境が健康問題を意識させやすくしているものと思われる。住宅問題はもとより地域性が強く現れる。農村では大都市と異なる問題が潜むが、これらを理解することも大都市の住宅問題の理解を深める元となる。住まいに関する公衆衛生分野からの取り組みを広げる上で、派遣元自治体数が増えることを望んでいる。なお建築衛生学部では地方での公衆衛生分野からの住居の取り組みや研究にも関心を払い、積極的に資料を収集しており、講義に生かしている。

ところで平成5年度のコースの中で従前と大きく変えた試みがなされた。従来住教育セミナーの中では、主として市民への住居衛生教育のテキストづくりをグループ討論と各種資料の活用で行ってきたが、今回はそこに自ら行う環境実測データを加えることにした。これは保健婦も一緒に参加してもらい、5グループに分かれて行った。短期間の内にいずれも興味深い環境

データを得て市民教育の教材を作成した。もとより日常業務で環境実測を経験する者は多いが、公衆衛生院で普段の業務と異なった環境の実測経験は視点を広げる意味で有益であった。ちなみにテーマは①屋外の木立や芝地とビル環境との温湿度の違い、②高齢者障害者の立場から見た街路や沿道建物の問題点と寸法実測、③公衆衛生院食堂の分煙効果実測評価、④研修生自身の自宅のダニ測定、⑤公衆衛生院宿舎及び民間社宅のカビ発生状況等身近な課題で行った。

さらに保健婦と環境衛生監視員の共学では全ての科目を共学とするには無理があるため、環境衛生及び保健のそれぞれの専門性の強い科目は同時時間帯に2つ用意し選択可能とした。ただし、一部環境衛生監視員が保健婦向け授業を取るなど、職種通りには別れなかった。これは前回の経験からもある程度予想したことで、視野を広げる機会と捉える学生が多いことを示す。ただし建築衛生学部職員の負担は大きい。

各保健所の住居に対する取り組みの報告会では研修が始まる前に各自が地元での取り組みに関する資料を揃え、互いに交換する事を試みた。以前の修了生からも最近自分達で作成したパンフレットや自治体独自で行った住居衛生研修のテキスト等が持ち込まれ、自治体相互の情報交換が一層成果を上げた。

当コースの修了生は回を重ねるに従って増える事になるが、派遣数の少ない自治体や派遣が中断しがちな自治体ではさほど増えず、地域で新たな取り組みを行うには不十分な所も少なくない。一部の修了生は地元に戻ってから他県、他市の同窓生と積極的に情報交換しているようであるが、ただし、交流が途切れがちな修了生もいる。日常業務にコース受講の成果を生かし発展させるためには、修了後の情報交換が不可欠である。修了生を軸に「住まいと健康」の情報連絡と活動のための全国組織をつくることが今後の課題である。

〈教育報告〉

特別課程「細菌」

コース主 任 本藤 良 (衛生微生物学部, 細菌)

副主任 吉田 洋子 (衛生微生物学部, 細菌)

1. はじめに

平成5年度特別課程細菌コースを、平成6年1月10日から2月10日まで約1ヶ月間にわたり開催した。本コースの期待する対象者としては、地研(保健所を含む)等において一定年限の細菌検査等の経験を持つもので、かつ現業務者を優先として選考にあたった。今回は、定員20名に対し40名の応募があり、本コースは隔年の実施と言う事も考慮に入れ、実習室の収容可能範囲内36名を受講許可した。研修生36名の構成は、衛研関係19名、保健所関係16名、市場検査所1名であった。男女比では、男性24名、女性12名で年齢は23歳から55歳と幅広い年齢層で研修を実施した。

2. コースの目的

保健所あるいは地方の衛生研究所等において、細菌一般検査および公衆衛生分野で細菌に関する調査研究等に関与している職員を対象にして、細菌学の体系的な理解と現状に対応した新しい知見および技術の習得を目的とした。

3. カリキュラムの概要(144時間)

- ①細菌学総論および各論
 - ②細菌感染症、免疫学および細菌感染症の疫学(総論と各論)
 - ③細菌検査法および診断法(総論と各論)
 - ④細菌領域における基礎実験法と遺伝子操作法(講義と実習)
 - ⑤施設見学(横浜検疫所、検疫センター)
 - ⑥寄生虫学と寄生虫感染症の検査法(講義と実習)
- 分子生物学的手法の臨床細菌学および細菌検査領域における応用が、現在最先端の一分野をなしている。

その応用性を知るには細菌遺伝学の知識が必要である。研修生の現業務における実用性を考慮にいれて、この項目に144時間の内36時間をあてて要望に対応した。また、今回から寄生虫感染症の項目を取り入れたことも特徴の一つである。

4. コース開催と成果

受講生の期待事項(アンケートによる)の主な項目を上げると、1)新知識と技術の習得(32名)、2)遺伝子レベルの基礎と検査技術の習得(14名)、3)他県施設との情報交換(23名)の3点であった。細菌学の体系的な理解と現状に対応した新知識と技術の習得に加えて、細菌遺伝学の基礎知識と分子生物学的手法の今後の応用性を考える所にポイントをおいた本コースのカリキュラム設定と受講生の期待事項とはよく一致し得た事になる。また、本コースの重要な特徴は受講生同志のコミュニケーションの成立である。本コースの受講生の大半は寮生活を強いられる事になり、各地方の地酒や名物なども加わり、意志の絆は自然に結ばれる結果となった。これは、各地域において現状業務を遂行している受講生にとっての情報交換のネットワークの成立であり、なかなか得難い事と考える。

以上の点においては、本コースの目的を十分達成したものと考えている。しかしながら、今回の受講生は、年齢23歳から55歳と巾があり経験年数も異なることから、コース内容の一部(特に遺伝学、免疫学)の理解度(難易度)に差が生じたのも事実である。現在の学究の進歩と社会の要求度から考えると、特に分子生物学、免疫学は現場においても避けてはとうれない現状にきていることでもあり、今後の対応の一課題とした。